寒鴉

喜瀬（きせ） 博

昭和二年一月の末近く、彼は、在る男の不意の来訪を受けた。雪晴の、底冷えのする午後だった。

これまでにもしばしば、彼の文学の愛読者だと称する未知の人間が、勝手に家に押しかけてくることがあった。こういう手合いには、玄関の格子戸に掛けた「忙中謝客」の札もあまり効き目がない。

たいがいは彼の細君が応対に出る。そして、多忙と病弱のゆえにあるじはとてもお会いできない旨、やんわりと言い含めて玄関先で帰ってもらう。

二階の書斎に居て聞くともなしにそのやりとりに耳をやっているようなとき、彼は、二十八歳の細君の〝玄関払い〟の話術に感心させられることが少なくなかった。これも、海軍士官の家庭に育ちながら、己のようなもの書きを夫に持ったせいでいつしか身についてしまった、処世法の一つであろうか。そう思うと、彼は唇の端に複雑な微笑を―友人・久米正雄言うところの微苦笑を、浮かべずにはおれなかった。

だが、この日の来訪者は、いつもの世間知らずな文学青年などではなかった。年のころ四十がらみ、いかにも仕立ての良さそうな黒の外套に小太りの身を包んだ紳士だった。玄関で細君に差し出した名刺には、「海野喜三郎／横浜市中村町唐沢××番地」とある。いや、そんなことより何より、男は一本の紹介状を携えていた。まだ、彼が文壇にデビューして程ない大正六、七年頃、横須賀の海軍機関学校で英語を教えていたときの先輩教授Kの紹介状を―。

Kは早稲田大学に在学中、同級の日夏耿之介と自作の詩を見せ合ったこともあるという人間で、小説家と教師の二足の草鞋（わらじ）を履き分けるのに難儀している彼のために、何くれとなく相談に乗ってくれたものだ。当時、鎌倉にあった新婚間もない彼の借家にも何度か遊びに来たことがある。

海軍機関学校を辞して七年。爾来、賀状の交換のみで再会も叶わずにいるが、彼はKの厚誼を忘れていない。彼は恩に着る質(たち)の人間だった。むろん、細君もKのことをよく憶えている。

そのKの紹介状を持つ来訪者とあれば、彼も会わないわけにはいかなかった。

脱いだ外套と鞄を小脇に、何かの紙袋を提げて、背広の男が細君の案内で書斎へ入ってきたとき、彼は「おや？」と思った。どこかで一度、会ったことがあるような気がしたのである。しかし、いつ、どこでだったか、思い出せない。

一方、男は男で、紫壇の机の向こうにふらふらと立ち上がった和服姿の主人の風貌を目にするや、一瞬怯んだように足を止めた。それも無理はない。肉の削げた蒼白の顔と、病的に赤い唇。秀でた、と言うには異様に広い額。鉢の開いた、大きな頭。脂気のない、たてがみのような長髪。白目の部分がやや青味を帯びた切れ長の眼だけは、炯々と生色を湛えて、じっと相手の顔を正視してくる―。

こんな彼を前にしては、初対面の人間なら誰しも、一瞬ギョッとせずにはおれまい。因みに近頃では、彼の好んで描く河童の戯画はいよいよ彼自身に似て妖気の度を加えてきた、というのが友人間のもっぱらの噂である。

それはともあれ、一通り挨拶も済んで、書斎のあるじと客は、机の脇の置き炬燵を間に向かい合っていた。細君が男から押しつけられた手土産―銀座・千疋屋で求めた林檎だとかいう紙袋を持って、書斎を出て行く。

「今の私は、くだものなんぞ口にしません。ほとんど薬を食って生きているようなもんです。それに―」　と彼はニコリともせず、額にかかる髪を掻き上げながら言った。「急いで仕上げねばならない原稿も控えております。せいぜい三十分ぐらいしかお相手できませんが」

「いや、それで充分です。突然お邪魔して、恐縮です」

大して恐縮している風でもなく応えて、男は猪首をめぐらし、和・漢・洋の　夥しい蔵書の並んだ本棚や、欄間に掲げた「澄流堂」の扁額を物珍しげに眺めた。

「ところでKさんはお元気ですか。横須賀の海軍機関学校を辞めて以来、すっかりご無沙汰していますが・・・」

「ええ、あの仁は先生と違って丈夫一式の人ですから」

彼は苦笑した。

「でも、武骨なくせに文学好きは相変らずでして、先生が中央公論や新潮に発表される御作には、必ず目を通しておるようですな」

この男、紹介状によるとKの縁戚に当たるとかで、ごく最近まで、満州・大連の新聞社で記者をしていたらしい。今は何をやって生計を立てているかについては、書かれていない。が、そんなこと、彼にはどうでもよかった。余計なことを訊ねて、そのぶん長居されたくはなかった。

「Kさんの書いているところによりますと」彼はさっさと本題に入った。「—あなたは私に自作の発句を見てほしいとのことですが、その方面のことでしたら、私なんかより他にもっと相応しい方がいらっしゃるでしょう。私は小説家です。句作りは創作のちょっとした息抜き、手すさびに過ぎません。」

男は、血色のよい童顔をほころばせた。

「ご謙遜を。巷間では、先生と久保田万太郎氏が当代文人俳句の双璧だという評判です。その通りだと思いますが、わたし個人としては、世話物的な万太郎俳句はあまり肌には合いませんでね、先生の、何と言いますか、—古格の裡(うち)に現代人の憂愁をにじませたような句が好みなんです」

男はそう言うと、やおら半眼になり、小声で経でも唱えるように、彼の発句を誦しはじめた。やがて階下から細君がお茶を運んで入ってこなかったら、男の低唱はいつまで続いていたことか。

男はやむなく咳払いをして、

「—僭越ながら先生がもう少し句作に時間と意欲を割いておられたら、これほど健康を損なわれることもなかったでしょう。少なくとも先生の発句には、先生の近作小説、『大導寺謙介の半生』とか『鬼の籍』のような、暗澹たるものは一句もありませんもの。ねえ、奥さん?」

妙に狎々しい口調で言った。が、細君は耳にとまらなかったかのように、

「何もございませんけど・・・」

炬燵の上の湯呑みと、金つばの皿の乗った盆を置いただけで、すぐに書斎を出て行った。金つばは青柳製で、某雑誌社の編集者から貰ったもの。

「暗澹たる? そんな句がないのは、何も私に限ったことじゃない」

彼は失笑した。笑うと、催眠薬の過度の常用で紫色を呈した前歯—そのうちの一本は欠けていた—が覗く。

「久保田さんの句も滝井折柴君の句も、いや、大方の俳人の句は、暗澹となんかしていません。それは、どう転んでも暗澹とはならないのが発句という詩型の本質だからです。功徳だからです。いかに悲惨な現実でもこれを泰然として諾い、易々と受け容れる。糸瓜(へちま)咲(さい)て痰(たん)のつまりし仏(ほとけ)かな—例えばこの句など、暗澹さの対極にあると言っていいでしょう」

「子規の絶句ですな」

「脊椎カリエスの業苦の果てに、のどに痰を詰まらせて絶息した自分を、もう一人の自分が宙から見下ろしている。非情とも違う、この客観の無類の明るさはどうです」

「しかしそこまで見極めておいでなら、たとえ一瞬でも、先生はその俳句的功徳に身を委ねてしまいたいと思われたことはありませんか」

彼は、ゴールデンバットの箱から一本抜いてくわえ、マッチで火を擦った。

「—ないですね」

「それは、なぜです?」

「それは—私の神経がそうすることを欲しなかったから、とでも答える他ないでしょう。発句に関しては所詮、私は一個のディレッタント、趣味人に過ぎません。そして私は、私のディレッタンティズムにしごく満足しています。そんな人間に向かって、芭蕉や子規居士の流儀を真似ろと言われても無理な相談です」

たばこの煙を浴びせられて、男が咳き込んだ。

『この闖入者め、いったい自分に何を喋らせようというのか・・・』

厠に起(た)った戻り、彼はふと、長廊下の途中で足を止めた。懐手のまま、硝子戸越しに外を見やった。

大震災から三年余。すっかり復興の成った東京郊外の家並みが、雪に蔽われた甍の屋根を重畳と連ねていた。一片の雲とてない視界の彼方に、蜃気楼のように浮かぶ白い山容は富士だった。

彼の家は田端でも高台に位置し、二階からは眺望が利く。だが、彼の視線はそのとき遠景でなく隣家へ—鋳金師・香取秀真(かとりほつま)の家の屋根へ、向けられていた。正確には、屋根の一端にじっと止まっている鴉へ、向けられていた。鴉は全身真っ青だった。

彼の義兄が、保険金目当ての自宅放火の嫌疑をかけられて鉄道自殺を遂げたのは、年明け早々のこと。この事件の後始末で、東奔西走を余儀なくされた彼の衝撃は大きかった。

年来の神経衰弱がいよいよ昂じた。催眠薬の助けを借りなければ、もはや一睡の安寧も得られないくらいに。

衰弱は神経ばかりではなかった。この時期、生れつき蒲柳の肉体もまた、さまざまな病に蝕まれていた。胃アトニイ、腸カタル、ピリン疹、乾性肋膜炎、蔓性結膜炎、脳疲労、心悸昂進、痔疾・・・等々。主治医の下島勲や、詩歌の畏友で青山脳病院長の斎藤茂吉などが与えた病名のいちいちを、彼は挙げることができる。

肉体の衰弱は神経の衰弱に拍車をかけた。（あるいは、神経の衰弱は肉体の衰弱に拍車をかけた）。彼が奇怪な幻覚症状に悩まされるようになったのも、最近のことである。

例えば、―一様に曲がった松林の中に立つ、海辺の白い洋館が、そんなはずはないのに何度見直しても、歪んで見えたこと。数メートル前を歩く赤犬が、振り返りざまニヤリと笑ったこと。つい先ごろ亡くなった知り人の女性と街なかですれ違い、にこやかに会釈されたこと・・・。

しかし、この日、隣家の屋根の上に見た真っ青な鴉が、彼の幻覚の為せる業なのか、それとも単なる光線のいたずらだったのかは、わからない。

彼は崩れるように、炬燵に戻った。

「あなたの発句とやらを、そろそろ見せてもらえませんか。約束の三十分を過ぎましたよ」

苛立った彼の声音に、男はつまんだ金つばを口へ持っていこうとして、驚いたような目をしばたたいた。

「―発句は、ありません」

「どういう意味です、それは」

男はぎこちない仕草で金つばを皿に戻すと、炬燵から出て、ズボンの膝を正した。そして畳に両手をつき、深々と頭を下げた。

「お許し下さい。実を申せば、自作の句を見てほしいなどというのは、先生の謦咳に接したい一念から出た方便でして。もとよりそのようなものは持参しておりません」

「あきれた人ですな、あなたは。Kさんも承知の上のことですか」

「いえ、いえ」と、男はぽっちゃりした手のひらを、顔の前でひらひらさせた。「先生もご承知の通り、あの人は真っ正直な人間です。前もってわたしの魂胆を見抜いていたら、紹介状の執筆など即座に断っていたでしょう」

「つまりあなたは、私とKさんの双方を騙したわけだ」
「騙す？！」男はちょっと悲しげに眉を寄せた。「どうかそう、悪意にとらないで下さい。わたしは先生の文学的才能に傾倒しておりますし、Kの清廉な人柄を敬ってもいます。そんなお二人を騙そうなんてつもりは、毛頭ありませんでした。ただ、さっき申し上げた通り、先生の警咳―」
「まァ、いいでしょう」と、彼は着物の袖口から竹筒のように細い腕を出して、男を制した。「今さらあたなを責めたところで、遅い。しかし、私に会いたいというあなたの所期の目的は果たされたわけですから、もうお引取り願えませんか。私は自分の仕事に戻りたい」
実際、どうしたことだろう。心身の衰弱の進行と逆比例するかのように、彼はここにきて創作意欲の沸々たるを覚えていた。親密にしている或る女性のツテで借り受けることのできた、帝国ホテルの一室に明日からでも籠り、書きたい小説の腹案が二、三あった。そのためには、既に数日前脱稿して推敲の筆を入れている最中の「弦鶴山房」を、早急に仕上げねばならない。自分の仕事に戻りたい、という彼の言葉に嘘はなかった。
男は狼狽した。
「ちょ、ちょっと待って下さい」
そう言うと、提げてきた革鞄を引き寄せ、何か中に入っているらしい大判の封筒を取り出して、炬燵の上に置いた。
「お願いです。あと十五分―いや、十分間だけ、わたしの話を聞いていただけませんか」
「・・・・・・・」
男は無言の彼を上目づかいに、躄(いざ)るように動いて、再び炬燵の裾に膝を入れた。
「先生が大阪毎日新聞の海外視察員として支那に渡られたのは、確か大正十年のことでしたな。実を言いますとわたしは、昨年までおよそ十年間、満州・大連の満鉄本社近くにある大陸報知社という新聞社に籍がございましてね、できることならあの時、旅行中の先生の道案内を買って出たいと希(ねが)ったものでした。―それはまァともかく、職業柄わたしは、在満十年の生活の中で実にさまざまな興味深い、面白い出来事を見聞し、また身をもって経験してまいりました。日本内地のそれとは一ト味違う、いかにも大陸風の出来事です。これは、その―」
男は炬燵の上の封筒を片手に押さえ、
「わたし個人の記憶として風化させてしまうには惜しい、奇譚と言っていい、そんな出

来事の数々を書き留めたノートでして。そっくり先生の創作の素材に提供しますので、後ほど是非お目を通していただきたい。わたしはこのノートの中身が先生の筆によってどう利用され、料理されようと、一切異存は申しません。お好きになすって下さい。先生には既に『トロッコと少年』など、いくつか第三者から得た材料にもとづく作品がお有りのようですが、わたしのノートはきっとそれらに優るとも劣らない成果をもたらしてくれるはずです。」

「・・・・・・」

「いや、正直言いますと、先生のお師匠さんであられた夏目漱石氏の『坑夫』―未知の青年の身上話に材を取ったあの異色作を、質においても量においても凌駕するような、先生にとって初の長編小説を生み出すことさえ不可能ではないと思っています。先生の文学的想像力と才筆をもってすれば、ね。・・・ここで誤解のないように一言お断りしておきますと、わたしはこのノートの提供と引き換えに、先生に対して何がしかの見返りを期待する、というような下心は全くございませんので」

男の長広舌に耳をやっているのかいないのか、懐手の彼は、さっきから目を瞑ったままだった。が、男は少しも意に介さないかのように、語を継いだ。

「わたしは先生に蘇っていただきたい、それだけです。最近先生がお書きになる、一作毎に己の躰の一部を切り刻むような擬似私小説は、あれは先生の本領ではないはずです。先生はずいぶんと志賀直哉氏の仕事に心服し、それにあやかりたいとでも思っておいでのようですが、所詮ないものねだりではありますまいか。先生には先生にしか書けないものがございましょう？　志賀直哉氏にあやかるとしたら、それは氏の作風や文体ではなく、時流に超然として、本心己の書きたいものを書きたいように書く、氏の悠々たる創作態度、姿勢ではありませんか」

蒼白の顔が、突如、カッと目を開いて、男を睨んだ。「あんたは、何者だ・・・？！」

五年前、大正十一年七月。画家の小穴隆一を伴って、我孫子の手賀沼のほとりに初めて志賀直哉を訪ねたときの記憶の断片が、映画のフラッシュのように彼の脳裡に閃いた。

―幸か不幸か、わたしは食うために何かを書くということはありません。ですから、書きたい材料がなければ、書きたいという衝動を感じなければ、二年でも三年でも書きません。冬眠します。

―あたなはどうしてそう急ぐんです。書き急ぐんです？

濃く太い、男性的な眉。二重瞼の温和さのうちに、聡明な光を湛えた大きな眼。高い鼻

梁。強い意志と強い精力を感じさせる唇。
この我孫子時代、既に「城の崎にて」、「和解」、「小僧の神様」等の名品を生み出し、さらに『暗夜行路』前篇を刊行したばかりの志賀直哉は、小説家として脂が乗り切っていた。
志賀居を辞した帰り道、彼は小穴隆一に嘆息まじりに言った。
「志賀さんのことばよりもあの立派な風貌を前にすると、それだけでちょっとかなわないナという気にさせられるね」
「ちょっとかなわないナという気にさせられますね」
小穴隆一が応えた・・・
が、彼のそんな追憶を知ってか知らずか、海野喜三郎は小さな目をまるで道化たようにしばたたかせながらたたみかけた。「—思い切って言ってしまいますが、このまま行けば遠からず先生は、精神生活に決定的な異常をきたすか、さもなくば自らいのちの根を絶ってしまわれるか、二者択一を迫られることになるでしょう。あるいはもう、うすうす迫られておいでかも知れませんがね？」
彼は、幽鬼のように立ち上がった。そして、
「あんたは、何者だ・・・？！」
もう一度言った。その嗄(しわが)れ声は三十五歳とは思えない、ほとんど老人のものだった。

冴々しい冬青空を背景にするとき、〻梅はことのほか美しい。文字通り〻細工のようにも、また、琥珀のようにも見えるこの庭木の小花を、彼はとても愛していた。
今が盛りの〻梅は所々雪を被(かず)き、冷々とした甘い香りを庭の一隅に漂わせている。だが、そんな花の風情にも芳香にも、この日の彼はこころ慰められることがなかった。
晩冬の午後の日差しが、はたと衰えを見せはじめた。
雪の上に凝然と佇みながら、彼は、つい今し方辞去していった海野喜三郎という男の言葉を、脳裡に反芻していた。「志賀直哉」、「決定的な異常」、「いのちの根を絶つ」、「二者択一」・・・。男が最後に浴びせかけた言葉は、一々彼の急所を刺した。面と向かって、それも文壇と関わりのない見ず知らずの人間から、あれほど辛辣なことを言われたのは、はじめての経験である。しかもあのとき、男が冷酷にも現実の明るみに引き出してみせたのは、常日ごろ彼自身が密かに意識し、畏怖していたことどもに他ならなかった。
満州の新聞記者くずれの、あの小男。本当はいったい、何者なのか。己の小説や発句について相当通じているような口ぶりだったが、しかしだからと言って単純な愛読者、信奉

者のたぐいだとは、とても彼には思えなかった。

『ひょっとして・・・？！』

彼の脳裡を、外気よりも冷たい一つの疑惑が貫いた。あれは、病的な己の神経が深層心理に働きかけて造り出した、幻影なのではあるまいか。それも、己の分身としての幻影なのではあるまいか・・。

奴が妻に案内されたはじめて書斎に姿を現した瞬間、初見の客でありながらどこかでかつて会ったことがあるような、奇妙な感覚にとらわれたものだった。あのとき自分は既に、奴が己自身の幻影に他ならないことを意識下で直観していたのではあるまいか。

エドガー・アラン・ポーの小説の主人公、ウィリアム・ウィルスンが刺し殺した幻影は、ウィリアム・ウィルスンと一卵性双生児のようにそっくりだった。が、あの男は、海野喜三郎は、彼と似ても似つかない容貌、体型の持ち主である。にもかかわらず、彼は男が己自身の幻影かも知れないという恐ろしい想念を打ち払うことができなかった。

第一、常識人のあのKが、たとえ「縁戚」の者にせがまれて渋々書いた紹介状であるにせよ、前もって自分に何の断りもなしにそれを持たせて不意の訪問を許す、というようなことは考えにくい。それに、紹介状の筆跡が—たとえばKの年賀状の筆跡と比較して—はたしてK自身のものに相違ないかどうか、確たる判断もつかないものだ。

もしも、と彼は思った。もしも後日、Kに問い合わせてみたら、紹介状を書いた覚えなどないばかりか、海野喜三郎なる「縁戚」も存在しない—そう明言されたとしたらどうだろう。

また、（実在すればの話だが）大連の大陸報知社とかいう新聞社に、あの年恰好、あの身体的特徴の持ち主で海野喜三郎という名前の男が、昨年までの略十年間、記者として在籍していた事実はない—そう判明したとしたらどうだろう。

あるいはまた、名刺にあった横浜の住所に同人が現在居住している事実はない、ということが分かったとしたらどうだろう。

さらにはまた、男が創作の素材として提供すると置いていったノートの中身が実は真っ白で、何も書かれていなかったとしたら—

彼はワッと叫び出したい衝動を堪(こら)えて、雪の庭にかがみ込んだ。そんな羽目にでもなれば、自分は間違いなく発狂すると思った。彼の母親は彼が生後八カ月の時、突如、発狂した。そして毎日、かわらけのような無表情で、狐の絵ばかり描いて暮らしたという。自分もいずれは母親の運命をなぞることになるのではないか。まだ若くて健康な時分から、発

狂への恐怖はしばしば彼の鋭敏な神経を苛(さいな)んだ。

雪の庭に蹲ったまま、彼は自問した。あの男が本当に己の幻影だったとすれば、奴は何のために自分の前に姿を現したのだろう。心身の衰弱の極みに追い詰められた自分を、救済するために？　否、と彼は内心かぶりを振った。

「わたしは先生に蘇っていただきたい、それだけです」―などと泣かせるようなことを言いながら、最後は、発狂か自殺か、自分が「二者択一」のどっちへ転ぶか、密かに愉しんで眺めているようなところが感じられた。悪意が感じられた。そしてその悪意さえ、元はと言えば己自身が生み出したものだ・・・！　彼は慄然として唇を噛んだ。そのとき、

「おとうさん、こんな所で何してるの？」

幼い声が、寒そうに背後で呼んだ。七歳の長男である。彼は首だけ振り向けた。

いつにも増して憔悴した父親の様子に怯えたのか、息子はにわかに顔を歪め、泣き出した。が、声は少しも洩らさず、涙だけが滂沱と頬を伝った。

着物の裾をはだけて、彼はよろよろと身を起こした。無言で息子の頭を撫でた。隣家の屋根を仰ぎ見ると、真っ青な鴉の姿は既にそこになかった。

―夜。彼は推敲中の原稿を棚上げして、翻然、新作小説の筆を執った。この日の来訪者との一件を二、三十枚の短編に仕立てるつもりだった。

もとより彼は、紹介状と海野喜三郎のことで後々Kに問い合わせてみたいとは思わなかった。また、満州の新聞社や横浜の住所についても同様、誰か人を頼んで真偽を確かめるつもりなどなかった。藪をつついて蛇を出すような、そんな恐ろしいことはしたくない。海野喜三郎が残していった千疋屋の林檎とノート入りの封筒、あんな物は明日にでも焚火の火中に抛(ほう)ってやろう。幻影が姿を消したのに、その形見だけが後まで「実在」しているのは気味が悪い・・・。

彼は、「寒鴉」と題したその小説の中に、海野喜三郎という悪意にみちた己の分身―幻影を、封じ込めてしまいたかった。現実界に再び姿を現すことがないように。

半截の原稿用紙の上を、彼の持つGペンは、何かに憑かれたように淀みなく走り続けた。

☆

半年後、すなわち昭和二年七月二十四日の未明。彼は、ヴェロナール及びジャールの致死量を仰いで自殺した。かつて支那旅行の折に買った浴衣を寝巻代りに着て、懐に細君宛の遺書があった。また、枕元には、親友の菊池寛や小穴隆一などへ宛てた遺書の他、「或故旧へ送る手記」が置かれていた。

後に遺稿として、「歯車の群れ」、「或阿呆の生涯」、「鵠沼雑録」などが筐底より発見されるが、それらの中に「寒鴉」の名はない。むろん、題名と書き出しの二、三行だけという、数多くの未定稿断片の中にも。

あるいは書いている途中筆を折った状態で、もしくは完成したものの何等かの理由で—彼自身が破棄したものか。それともまた、そのいづれかのかたちで、今も人知れぬどこかに存在するのだろうか。真相を知る手がかりは、何もない。